

# 第25回舞踊学会報告

## 生涯と舞踊

### 第1日目「日本舞踊における早期教育」

講演：郡司正勝

デモンストレーション

その1 日本舞踊の手ほどきの方法をみせる

その2 江戸期以来の手ほどき作品

その3 江戸以降の手ほどき作品

出演：林一枝，他一門

ディスカッション

林一枝，志賀山葵，西形節子

司会：目代清

### 第2日目午前「能・狂言における伝承」

講演：羽田昶

デモンストレーションとお話

山本則直，山本泰太郎

司会：羽田昶

### 第2日目午後「日本の民俗舞踊をめぐって」

講演：吉川周平

「アジアの民族舞踊の伝承をめぐって」

講演：宮尾慈良

レクチュア・デモンストレーション

韓国の仮面舞踊（タルチュム） 朴貞子

中国雲南省ジノ一族の舞踊 黛節子

インド古典舞踊カタック 立田信子

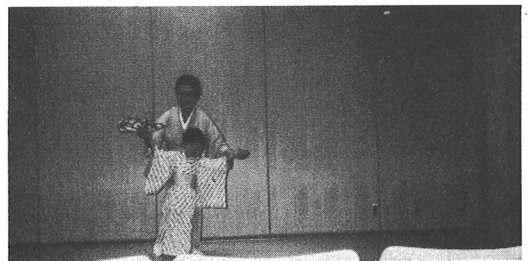
インド舞踊劇カタールカリ バーバリッジ順子

司会：宮尾慈良

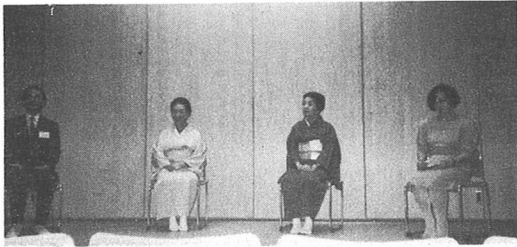
第1日目は、郡司正勝氏による講演に始まった。ここでは「生涯と舞踊」を考えるうえでの基本的な視点が示された。氏は小寺融吉氏の“舞踊のあゆみ”（昭和18年刊行）を例にあげ、人は母親の胎内に始まり、死に到るまで舞踊とのかかわりをもつと述べ、そのかかわり方には、たしなみとしてかかわる人及び専門的にかかわる人がいるので、これ等を同様に論ずることはできないだろうということ、舞踊をいつ始めるのかという点については、世阿弥の『風姿花伝』のなかの「大方七つをもってはじめる」という、七を重視し、その数字の由来についての氏の見解が示された。

舞踊教育という呼称に関しては、大正10年ごろの芸術運動に発しているとの説明があり、小寺融吉氏の『おどり通』（昭和5年刊行）では、子供のおどりについて、やる踊りと大人にみせるための踊りに分けられていることや、うたへのあて振りにはむしろ俗悪であり、もっとその心をあらわすべきだという小寺氏の見解が紹介された。

以後、林一枝氏による手ほどきもののデモンストレーションに移り、幼児を対象にその方法が被曝された。「捨奴」，「赤い鳥」などの教え方において、子供の背後にぴたりと、指導者がついて「かたち」を教えるのが印象的であった。



その他、大正13年頃の林きむ子の作品のいくつかを紹介された。これらの作品には、草創期の児童舞踊と通じたダイナミックな動きがとり入れられているのに私は感心した。このあと、会場との討論に移った。その論点はおもに、昨今の子供の



入門減少傾向について、はじめる年齢について、身体の使い方（体軸、呼吸法など）と他の身体運動との共通点についてなどであり、これらについての活発な意見のやりとりがなされた。

第2日目午前「能・狂言における伝承」は東京国立文化財研究所の羽田昶氏による講演に始まった。同氏は、現在の能・狂言の七役籍、二十四流派の概観を表で示し、シテ方と三役とでは役割がちがうのに応じて修業のありかたもちがうこと、とくにシテ方と狂言方は、シテ・ツレ（狂言の場合はシテ・アド・アイ）・地謡・後見など多くの役種を担当する、言い換えれば常に立ち方と地方とを兼ね、さらに面・装束・作り物・小道具の保存・管理・着装という裏方的な役目をも兼ねること、それらのすべてに専門的素養を積む必要があることなどを強調した。また、伝承法の諸形態として、①世襲制、②徒弟制、③能楽養成会、④東京芸術大学音楽学部邦楽科能楽専攻、⑤国立能楽堂の三役研修が紹介され、家柄の子弟と弟子家の関係、婦人能の問題、伝承と教育についての説明がなされた。つづいて大蔵流狂言方の山本則直・泰太郎父子によるデモンストレーションに移り、小舞「盃」「土車」「雪山」「道明寺」「海人」「七つに成子」「柴垣」、「翁」の千歳之舞、間語り「田村」「定家」、狂言「しびり」が演じられ、親から子への伝承法が披露された。ここでの自分で気がつくまで苦勞をさせる、悪い部分を指適せず、ただ叱るなどの教え方はきく側に大変きびしくひびいたが、この時間以外では信頼に裏づけられた親子関係があるとの説明に納得させるものがあった。日本舞踊の手ほどきにしても、能・狂言の伝承にしても、その手ははじめは、「かたち」を教えるということに重点があるという点では共通であると思われた。

第2日目午後は、吉川周平氏による「日本の民俗舞踊をめぐって」の講演があり、氏が実際に



取材した「姫島の盆踊り」を手がかりにそのビデオフィルムをみながら、性別、年齢による役割の分担、伝承者と享受者にとっての意味についての氏の見解が示された。

そのあと、「アジアの民族舞踊の伝承をめぐって」というテーマで宮尾慈良氏による講演にうつった。このセッションでの氏の見解は、後に述べていただく（P.P. 53-54 参照）。

今回の企画は、ともすると、あいまいで、ばらばらになりがちな舞踊の実践や理論を「伝承」ないしは「教育」を通して結合してみようという意図があった。これを実現するには、実践者と研究者が自分の専門の枠をはづして歩み寄りねば解決できないことが少なくなかった。したがって、出発に際しては、「生涯」「教育」「伝承」という言葉の吟味にはじまり、運営委員の方々による数回の討議を経て成立したものである。2日間にわたった会の中味から、現在、舞踊において何が教えられているのかということをおしえてくれる側と学ぶ側にたって考えることができた。日本舞踊や能狂言での「かたち」を教えることにはじまる日本の伝統芸能は、その「こころ」を伝承する、いや見出すのに長い時間が必要とされる。しかしながら、このようにかたちに始まり、こころを獲得していく、まさに、人の生涯に成就する舞踊の方法は長い伝統からうまれた人間の貴重な遺産である。西洋舞踊のジャンルに属する私などは、これらを糧として、どの時期に何を伝え、教えるべきなのか深く考えさせられた。

ともかく、会を終えるにあたり、ご協力頂いた、講師や出演者の方々や今回の企画委員である目代清、金井英三枝両先生、舞台裏で庶務をひきうけて下さった志賀山葵氏に感謝したい。

（石黒節子）

## 「アジアの民族舞踊の伝承をめぐって」

### I

今回のテーマ「生涯と舞踊」にそって、アジア各地の民族における舞踊を生業教育としてどのようにとらえ、伝承していくかを考えてみた。この生涯教育（long life education）というものの意味は継続教育（continuing education）と考えておきたい。すなわち、一般の人が大学の教育をすぎ、子供の教育を終えた30代、40代、50代になっても再び大学や教育機関で学ぶこととして、一生涯のなかで、いくつになっても学び、広く教育という視点から舞踊を取り上げなければならない。

ところで、これまで報告された日本舞踊や能、狂言において、この生涯（教育）という言葉の定義あるいはアグリーメント（合意、意見の同意）が明確さをもたなかったため、舞踊の伝承の仕方

またはその方法の発表になってしまい、比較研究ができなかったことは残念である。わたくしは、舞踊が人々の一生涯のなかで、特別な環境や条件をもたなくても、いつでも舞踊を学ぶことができる人々の生涯教育に役することを考えたとき、アジア各地の舞踊がどのように教育され、伝承されているかをみてテーマを絞ってみることにした。

アジア舞踊の伝承をみたとき、それは日本と同じく世襲、一般に分けることができる。世襲として舞踊を伝承するには、どうしても伝承しなければならないという世襲的といえる特別な条件をとまないので、当然ながら早期—5歳あるいは6歳頃—からの舞踊教育がなされている。これは身体的に柔軟なことがいえるようである。舞踊における芸の伝承は、宮廷、代々から伝える家系、あるいは師匠（インドのグルなど）から弟子へがある。さらに各民族における舞踊は、きわめて社会的・集団的で儀式的な性格をもっていることも考えると、舞踊を特別に伝承するものが世襲的に伝承しているといえる。これも一般とは違う伝承といえよう。

しかし、生涯教育と結びつく伝承は、世襲の伝承ではなく一般における舞踊の伝承である。子供を育てた母親や余暇をもてる人々が、たとえば英会話やテニス、ゴルフに気が向くのは、意識下においては自分の知識、教養、文化として行うのであろう。ところが、舞踊を学ぶことはどうであろう。そこには年齢的に若いという条件または年を過ぎているというものが妨げになっていれば生涯（継続）教育とはいえない。すなわち、誰でもが舞踊をする喜び、楽しみを知り、そのことが人間として心身ともに大切なことであることを教えるのが、わたくしたちの仕事ではないかと思うからである。これは舞踊に対して、いままでの人々がどのような認識を持っているのかどうか、あらためて考えなければならない。

ここでは外国において舞踊への認識の違いを述べなくてはならないが、焦点を生涯教育としてあてた場合、どのようにアジアでは受け止められているのかを、実際に外国で学んできた舞踊家と私がアジア各地でみてきた印象をもとに考えを提言することにしたい。

## II

アジア各地の舞踊を伝承することに関して、生涯教育として考えたいことは、(1) 舞踊を学ぶとは、アジアの人々にとってどのような意味をいうのか。(2) なぜアジアの舞踊を学び、伝承しているのかをデモンストレーションをしながら教授してほしいことにある。

今回は時間の都合上、発表された方は4人（このほかタイ、ネパール、インドネシアのジャワ、バリなどに学んだ舞踊家もいました）だが、こ

れらから日本におけるアジア舞踊の生涯教育あるいは継続教育として舞踊の伝承方法の可能性を考えてみようとするにある。

- a) 祖国を離れた外国人が、自国の文化を舞踊という形で伝承していく、つまり異文化のなかでの民族文化の伝承を韓国の仮面舞踊劇（タルチュム）を通じて日本人（当日の出演者）に教えている朴貞子さんに発表してもらった。これから国際化する日本の文化として舞踊をいかに伝承するか考えさせられる。
- b) 日本人として日本民族の舞踊を研究し、実践している黛節子さんは、日本の舞踊の源流として中国の雲南地方の現地に出掛け、自ら身体をもって舞踊を伝承しようとする。これから日本の舞踊家が日本民族の舞踊（日本舞踊とは違う）を考えると同じような伝承のプロセスをとる示唆を示した。
- c) インド舞踊のカタックを伝承する立田信子さんは、ヨガの静なるものの具現化である動なるものの形としての舞踊をカタックにもとめ、現地での2年あまりの研究を通して、個人的な勉強の延長として舞踊を精神的な形の伝承を教えてください。これからの人々が自分の教養文化として舞踊を学ぶことの例を示してくれた。
- d) 南インドの舞踊の一つであるカターカリを伝承するバーバリッチ順子さんは、アメリカに十年近く住み、アメリカの大学にて、アジア舞踊を学んだ。外国においてアジアの舞踊とは何か、どうして学ぶのか、そしてどのように伝承されているかを発表してもらった。将来、日本にてアジアの舞踊という授業が大学にて開講されるならば、いったい何をどのようなプロセスをもって伝承していくかにおいて、教えられることが多かった。

以上、アジア舞踊における生涯教育について簡単に報告を述べたが、日本人としてアジア舞踊を伝承する心のすばらしさを各発表者が教えてくれたことは、ひじょうに嬉しく思う。また、いまだ舞踊と生涯教育について考える機会が持たれることを願っている。

（宮尾慈良）